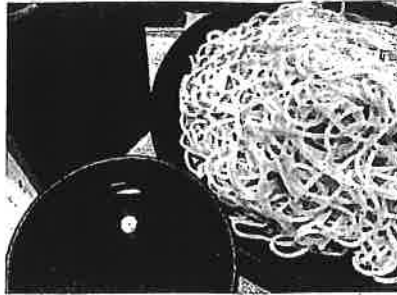


# 北米産玄ソバ1割安

## 消費不振、7年ぶり下落

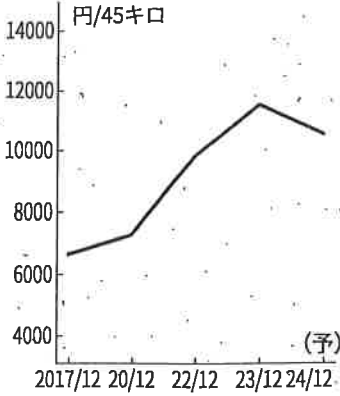
24年産見込み

そばの原料となる玄ソバ(殻付きの表)の流通価格が下落する見通しだ。北米の2024年産の日本向け契約栽培価格の交渉が、7年ぶりに引き下げで決着した。23年産の流通価格の上昇を受けて消費は不振となっており、日本側が要求した値下げを産地側が受け入れた。ロシア産などの輸入増加も下押し圧力を強めている。



北米産の玄ソバは下落する見込み

### 北米産ソバは下落見通し



### ロシア産輸入増も影響

そばは原料の多くを輸入に頼っている。輸入品の6〜7割が中国産、北米産が1〜2割を占める。外国産は国産と比べ安く、主に立ち食いそば店や小売り用の乾麺などに使われている。国産が台風などの自然災害に見舞われ収穫が減った際、風味が良いとされる北米産に代替されることが多い。

そばは原料の多くを輸入に頼っている。輸入品の6〜7割が中国産、北米産が1〜2割を占める。外国産は国産と比べ安く、主に立ち食いそば店や小売り用の乾麺などに使われている。国産が台風などの自然災害に見舞われ収穫が減った際、風味が良いとされる北米産に代替されることが多い。

北米の生産者と日本の専門商社との交渉では、北米産玄ソバの卸値(24年産)は1俵(45kg)あたり1万5,000円前後で妥結した。流通している23年産と比べて9%安くなる見込み。下落するのは17年1月以来の7年ぶりだ。

背景には、まず近年上昇してきた卸値の反動が出た面がある。足元で流通する23年産の北米産玄ソバ(東京地区)は1俵1万1,500円前後で、比較可能な08年以降で最高を記録していた。主産地である米ワシントン州の一部の生産者が収益性の高い牧草などへ転作し、作付面積が減少傾向と目撃されている。米国の生産者が当初のオフピーク価格を下げたことを示唆した。

ロシア産など割安な外国産の流通増加も卸値の下押し圧力となった。ロシアは世界最大のソバの産地だ。専門商社の三忠(東京・江東)によると、ロシアの23年の生産量は約140万トという。例年の100万ト程度を上回っている。貿易統計によると、ロシア産のソバ抜き実の23年の輸入量は3160ト、22年に比べて4倍近い増加となった。

別の専門商社の担当者は「ロシア産は1俵あたり7000円前後と北米や中国産と比べて安く、立ち食いそば店などは仕入れを増やしている」と話す。ロシアだけでなく、カザフスタンの23年の輸入量(玄ソバ)も3127トと、前年の11倍に増えた。北米産の値下がりには、日本の製粉会社にとって原料費の減少につながる恐れがある」と語る。

### ガソリン4週ぶり上昇

店頭174.4円、原油高で

ガソリン店頭価格が4週ぶりに上昇した。資源エネルギー庁が27日発表したレギュラーガソリンの店頭価格は(全国平均、25日時点)は、前週比0.1円高い174.4円だった。原油高でガソリンの卸値が上昇したが、政府の補助金で小幅な値動きを抑えられた。21〜27日の補助額は21.2円と前週に比べ0.1円増えた。補助金の増額は本来であればガソリンの店頭価格の下落要因になる。増額分以上に原油価格が上昇したため、給油所に対する石油売りの卸値が押し上げられた。4月1日時点のガソリン価格は補助金がなければ198.1円になると見込まれる。政府の目標水準である175円程度に抑えるため、23.3円が28日から1週間の補助額となる。石油情報センター(東京・中央)は4月3日発表の店頭価格について「小幅な値上がりが見込まれる」としている。

この先の価格交渉を懸念する声も出ている。製粉会社の担当者は「安値での妥結は米国の農家の収入が減り、(インセンティブが落ちて)生産量が下れば、将来的に北米産の仕入れが困難になる恐れがある」と語る。